

## ある夏のできごと

小さな体を縛りあげる趣味はないから、赤い革ベルトで手首をしぼり、同じように首に巻いたベルトから伸ばした短い鎖に繋いだ。

「歩君、良く似合うよ」

頬を撫でるとビクビクと体を震わせる。

怯えきった目を早くかえてやりたくて、ベッドへ横たわった体に手を伸ばした。

「今度は優しくおっぱいなでなでしてあげようね」

「ふ、あ、あ、…………っ」

口を閉じれない、嫌と言えない唇からは、泣き声とも喘ぎ声ともつかない声がこぼれだす。

「約束を破りそうな時はイイって言うといいよ」

「楽しそうだな、俺も混ざるか」

仲間が立ち上がりベッドへ近づく気配に歩から安堵のため息が漏れる。

友達を傷つける人が傍にいなかったことが歩にとってどう言う意味を持つか、理解していないからだろうが。

俺は歩の頭上へ回り、仲間が足元へ腰を下ろす。

「皮被ったままか。可愛いな」

無遠慮に捕まれたペニスに、再び怯えた顔がどう染まるのか、目が離せない。

「あっ、ひゃ……、んん……」

小さなペニスを口にくわえられたことに、信じられないものを見る目で足元を見つめる。

見やすいように座らせ、後ろから乳首を弄ってやると、背中を震わせ、「あん…」と可愛い声を漏らした。

ひとしきり柔らかな弾力を楽しんだのだろう。

口を離すと唾液まみれのペニスは天を仰ぎ、僅かに皮から桃のような先端が顔をだした。

「あ……っ、あああっ！」

指で輪を作ると、濡れて滑りの良くなった包皮をゆっくりと扱きだす。

自分で弄ることはあってもこの幼さだ、はじめての刺激に違いない。

頬を赤く染め、体を震わせる小さな体が愛おしく、摘んだ乳首を優しく擦ってやる。

「あああ……、んっ、イイ……、ああっ！」

閉じそうになった唇を開き喘ぐ様子がたまらない。  
後ろから細い体に抱き着き乳首を口に含むと、細い体が痙攣する  
ように震えた。

「ひやあああ…っ、あ、んっ、あ…」

下へ目をやると、少しだけ剥かれ濡れた亀頭が仲間の舌で舐め  
回されている。

「ああっ、や、溶けちゃ、やあああ——っ！」

今までになく大きく痙攣した歩の乳首から口が離れそうで強く  
吸い上げてしまった。

「あっ、あっ……」

乳首から顔を離し目を閉じてしゃくりあげる歩を見ていると、  
しばらくしてまた、「やっ、あっ」と声が上がりだした。

「イってないのか？」

包皮を引っ張り、亀頭の奥まで舐めようとしていた仲間が「ち  
ゃんとイかせたさ」とだけ言ってまた小さなペニスを弄りだし  
た。

「いやあっ！あっ、ああ…っ」